

「3.11」から10年を迎えて

「3.11」から10年を迎えました。2011年3月11日、私はインド洋の島国・スリランカの世界遺産都市・キャンディに滞在していました。JICA一般廃棄物調査ミッションのメンバーとして、埼玉大学の先生方と一緒にペラデニア大学の先生方と廃棄物調査の打合せをしていた時、会議室へ駆け込んできた大学職員が「日本で大きな地震があったようだ」と知らせてくれました。その後、調査で訪問したガンボラ町役場のテレビでみた仙台平野を流れる真っ黒な津波の映像に愕然としましたが、それ以上に翌日（2011年3月12日）、BBC国際放送からながれた福島第一原子力発電所（1F）1号機の爆発映像にはとても強い衝撃を受けました。

日本の社会学者として自分はやるべきことをやってこなかった。この想いが私にとって「3.11」の初心であり原点です。以来、この10年間、自らの研究の重点を原子力政策研究と福島復興研究におき、さまざまな取り組みを行ってきました。この間の研究概要については、2021年2月末に早稲田大学が「東日本大震災から10年」の特設Webサイトを公開し、その中で私の福島復興研究も紹介されていますので、以下のサイトをご覧ください。

■ 研究紹介記事

https://www.waseda.jp/inst/shinsai10sp/research_1/

■ 早稲田大学 特設 WEB サイト TOP

<https://www.waseda.jp/inst/shinsai10sp/>

1. 早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンターについて

早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンターの活動は、2019年1月27日の第3回ふくしま学（楽）会で公表した「福島浜通り社会イノベーション・イニシアティブ（SI構想）」をベースに、1F廃炉の将来像や1F廃炉プロセスの地域資源化を研究する「1F廃炉の先研究会」（2019年7月設置）と、原発事故と原子力災害の教訓を活かした新しい学術・文化の知の拠点構想を研究する「国際芸術・学術拠点構想研究会（A&S研究会）」（2020年4月設置）を中心に展開しています。

なお、次回の第8回ふくしま学（楽）会は2021年8月開催を予定し、まもなく調整を開始します。

2. 「1F廃炉の先研究会」について

「1F廃炉の先研究会」は、2020年5月6日に「中間報告」を公表し、1F廃炉のあり方を技術的観点と社会的観点とを統合して検討すること、早い段階から地域社会との対話を行い、1F廃炉の進め方と将来像に関する多様な選択肢を地域社会と共に考え議論することを提案しました。

「中間報告」に基づき、2020年5月17日に福島・地域対話会合（住民10名）、2020年8月28日に東京電力・国とのステークホルダー会合（東京電力4名、経済産業省資源エネルギー庁2名）を開催しました。こうした地域対話会合および東京電力・国との対話をベースに、2020年10月29日には第1回「1F廃炉プロセスの地域資源化に関する地域対話会合（3者会合）」

を、「1F 廃炉の先研究会」（12 名）、地域社会（19 名）、東京電力・国（7 名）の 3 者で開催し、その後、2020 年 11 月 26 日に第 2 回、12 月 17 日に第 3 回、2021 年 1 月 12 日に第 4 回を開催し、2021 年 3 月 30 日には第 5 回 3 者会合を開催する予定となっています。

また 2021 年 3 月 6 日には、関連事業として第 10 回 原子力政策・福島復興シンポジウム「1F 廃炉の将来像と『デブリ取り出し』を考える」を約 130 名の参加で開催し、客観的な根拠・データに基づく 1F 廃炉政策の必要性和 1F 廃炉の将来像に関する多様な選択肢を、技術系・社会系の専門家と地域社会が協働して考え議論する「場」づくりの出発点となりました。

今後は、原子力規制委員会が公表した「東京電力福島第一原子力発電所事故の調査・分析に係る中間取りまとめ」（2021 年 1 月 27 日）のオープンな議論の「場」を設けるため、「1F 廃炉の先研究会」主催のシンポジウム「福島第一原発事故の真実と 1F 廃炉の将来像を考える：原子力規制委員会『中間取りまとめ』から見えてきたもの」として、2021 年春に開催を予定しています。

3. 「国際芸術・学術拠点構想研究会(A&S 研究会)」について

SI 構想のもう一つの柱である「国際芸術・学術拠点構想研究会（A&S 研究会）」は、2020 年 8 月 6 日に「中間報告」を公表し、国が福島県浜通りに設置を計画している国際教育研究拠点のあり方を、ロボットや再生エネルギーなどの技術開発といった狭い 20 世紀的な発想ではなく、原発事故と原子力災害の教訓を踏まえた新たな学術文化の知の拠点（500 年前にアートとサイエンスを融合し、人類史上初の変革者といわれるレオナルド・ダ・ヴィンチを参照したの 21 世紀における新たな知の拠点と未来人材の育成）の必要性を提案しました。

「中間報告」を踏まえ、復興知事業に取り組む早稲田大学、東京大学、近畿大学、東日本国際大学、福島高専による 5 大学協働事業として、「福島復興に必要な国際教育研究拠点とは何か？」をテーマとするシンポジウムを、2020 年 8 月 9 日に第 1 回、2020 年 10 月 31 日に第 2 回を開催し、また A&S 研究会主催として 2020 年 12 月 22 日に第 3 回シンポを開催し、技術系と社会系の多様な専門家、地域社会、復興庁、福島県企画調整部、浜通りの地方自治体などの関係者と共に、国際教育研究拠点と A&S 構想についての議論を積み上げてきました。

こうした A&S 研究会や 5 大学協働シンポの議論などが反映され、2020 年 12 月 18 日に国の復興推進会議で決定された国際教育研究拠点の政府成案では、新たに第 5 の研究分野として「原子力災害に関するデータや知見の集積・発信」が設定され、1F 廃炉や原子力災害に関する社会科学が位置づけられることとなりました。

今後は、第 5 分野「原子力災害に関するデータや知見の集積・発信」をどのように具体化していくのかを軸に調査研究を行い、エコミュージアム構想や 5 大学協働事業などを発展させていきます。また、国際教育研究拠点に関する地域対話の「場」を創ることが不可欠と考え、復興庁、福島県、地元市町村などとの調整を行っています。2021 年 3 月 4 日には、ふたば未来学園の先生方とご相談し、2021 年夏前には、ふたば未来学園において国際教育研究拠点（特に第 5 分野）と A&S 構想に関する地域対話会合の開催を予定しています。

「3.11」から 10 年を迎え、早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター開設から 5 年を迎えることとなります。「3.11」の初心を再確認し、気持ちを新たに 10 年からの一歩を、皆さんと一緒に踏み出していきたいと考えています。

引き続きよろしく申し上げます。